久留米市文化財調査報告書　第 428 集

筑後国府跡

―第 304 次発掘調査報告―

令和３（2021）年３月
久留米市教育委員会

序

久留米市は古くから水路と陸路の要衝としての位置を占め、筑後地方における中心地として発展を遂げてきました。また、それに伴い市内各所に数多くの文化財が残されています。

今回の調査は、久留米市街地の東部にあたる筑後国府跡で実施しました。今回の発掘調査とその成果を通して、久留米の歴史と文化財保護に対する理解や普及などに貢献できれば幸いです。

また、今回の発掘調査に際して、土地所有者の方をはじめ、近隣住民の皆様に多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

令和３年３月 31 日

久留米市教育委員会
教育長　井上　謙介

例言

1．本書は共同住宅建設に先立ち、[redacted]氏の委託を受けて実施した、筑後国府跡第 304 次調査の発掘調査報告書である。
2．調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、久留米市市民文化部文化財保護課の長谷川桃子が担当した。
3．遺構実測図の作成は、調査担当者と藤木幸子、中村麻衣が行い、浄書は長谷川が行った。
4．遺物の実測と浄書は長谷川が行った。
5．遺構写真は Canon EOS6D Mark Ⅱを用いて撮影した。遺物写真は、PENTAX K- 1 Ⅱを用いて長谷川が撮影した。調査区全景は、有限会社空中写真企画がドローンを用いて撮影した。
6．図面の方位は座標北を示す。基準点の座標は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を用いた。なお、平成 28 年の熊本地震に伴うパラメーター補正は行っていない。
7．遺構表記の略記号は、ＳＢ－掘立柱建物、ＳＤ－溝、ＳＦ－道路遺構、ＳＫ－土坑、ＳＰ－ピットを意味する。
8．実測図と観察表、写真図版の遺物番号は全て同一である。
9．出土遺物・図面等諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
10．本調査の略記号はＴＫＨ -304、調査番号は 202012 である。
11．本文の執筆と編集は長谷川が行った。
12．越州窯系青磁の分類は、太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡ＸＶ　陶磁器分類編』太宰府市の文化財第 49 集による。

本文目次

Ⅰ．はじめに……1
Ⅱ．位置と環境……2
Ⅲ．調査の記録……5
Ⅳ．総括……9

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

本調査は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。令和２年３月 26 日、土地所有者から久留米市東合川町字上 138 番１における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である筑後国府跡に含まれ、試掘確認調査においても遺構が確認されたため、発掘調査が必要である旨を回答した。同年６月 29 日に「発掘調査の依頼」が提出されたため、同年８月 12 日に久留米市長と土地所有者は筑後国府跡第 304 次調査の委託契約を締結した。

現地調査期間は令和２年９月 14 日から 10 月５日まで行った。遺物整理と報告書作成は令和３年３月 31 日まで行った。調査面積は 208 ㎡である。

２．調査及び報告書作成にかかる体制

調査委託者：[redacted]

調 査 主 体：久留米市教育委員会　教育長：井上　謙介

調 査 総 括：久留米市　市民文化部　部長：竹村　政高

次長：西村　信二

文化財保護課　課長：水島　秀雄

課長補佐：久保田由美

課長補佐兼主査：白木　守　　丸林　禎彦

主査：水原　道範

事務主査：小澤　太郎

調査担当：長谷川桃子

整理担当：米澤美詠子　　今村　理恵　　宮﨑　彩香

発掘調査臨時職員（会計年度任用職員）

秋永　絹子、川原　初美、松尾　朱美、高尾　春代、田中　樹子、田中とし子、中村　麻衣、藤木　幸子、丸山　幸、溝口　輝男、渡辺しげ子、矢野　崇徳、本多　正好

発掘調査整理臨時職員（会計年度任用職員）

大津山恵津子

Ⅱ．位置と環境

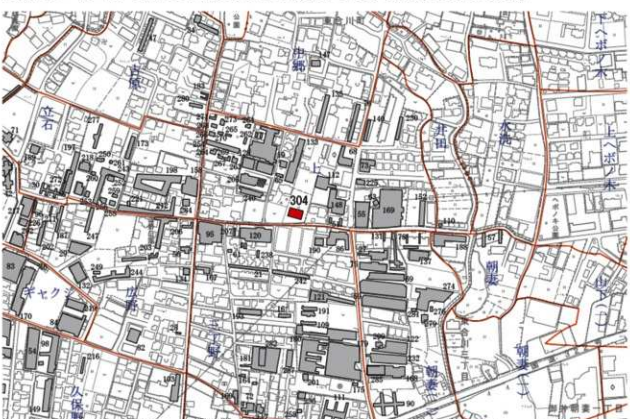
筑後国府跡は、耳納山地西端に聳える高良山から北西へ派生した東西 1.0 km、南北 0.7 km程度の低位段丘上、通称枝光台地に立地する。段丘の南には水縄断層帯が東西にのび、断層崖下には湧水がみられる。国府域は、台地の西側の高良川、東側の井田川、北方の筑後川氾濫原、南方の水縄断層系の断層崖によって画されている。

筑後国府跡付近では、旧石器時代から近世まで数多くの遺跡が確認されている。旧石器時代では、二本木遺跡や野口遺跡でナイフ形石器や台形石器などが縄文時代以降の遺構の埋土・包含層から出土している。縄文時代では、竪穴状遺構や土坑などが確認されている前期～後期の野口遺跡をはじめ、筑後国府跡、神道遺跡、西小路遺跡、新府遺跡、上遺跡、ヘボノ木遺跡、横道遺跡、水洗遺跡などでも資料が得られている。弥生時代では、中期から後期の甕棺墓 63 基や土壙墓 4 基、祭祀土坑 12 基が確認された安国寺甕棺墓群、前期末から中期初頭の甕棺墓や内行花文鏡を副葬した石蓋土壙墓が発見された市ノ上西屋敷遺跡、中期の甕棺墓や竪穴状遺構、環状土坑列が確認された市ノ上北屋敷遺跡などがある。その他、新府遺跡、西小路遺跡、ヘボノ木遺跡、二本木遺跡などで遺構と遺物が確認されている。筑後国府跡の古宮地区においても、溝や後期前半から終末期の方形の竪穴住居、掘立柱建物、甕棺墓が確認されている。古墳時代では、新府遺跡で竪穴住居が、市ノ上東屋敷遺跡で方形区画溝が確認されている。また、高良山から派生した丘陵上に位置する福聚寺古墳

第 1 図　調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

群では、円墳に加えて前期の方墳２基が確認されている。

筑後国府成立以前の７世紀中頃、通称枝光台地の北西部を中心に、大溝、土塁、河川等に囲まれた軍事的性格の強い官衙群が展開する（前身官衙）。大型建物群の方位はほぼ真北方向で一致し、計画的に造営されている。663 年の白村江の戦い後の筑紫平野の防衛のための施設と考えられており、中でも田代地区の大型四面廂建物は中心的な施設とみられる。筑後国が成立したとされる７世紀末、南北約 170 m、東西 100 m以上の築地塀や溝で区画された政庁が枝光台地西部に営まれる（Ⅰ期政庁）。区画内部の北東部分に、正殿・脇殿・前殿にあたる掘立柱建物群が検出されている。８世紀中頃、枝光台地の中央部にⅠ期政庁から東へ約 200 mに、築地塀で区画された南北約 75 m、東西 67.5 mの政庁が営まれる（Ⅱ期政庁）。Ⅱ期政庁は、９世紀前半には瓦葺きの建物となり、10 世紀中頃に火災で焼失するまで存続すると考えられている。Ⅱ期政庁と浅い谷を挟んだ南東約 200 m付近では、９世紀中頃から後半まで北辺約 85 m、南辺約 70 m、南北長約 180 mで囲繞された国司館が営まれたと想定され、南辺溝から出土した「守舘」墨書土器がその根拠となっている。10 世紀中頃、Ⅱ期政庁から東へ約 600 m付近に政庁を築造している（Ⅲ期政庁）。Ⅲ期政庁では幅約３mの大溝で区画された南北 141 m、東西 137 mの範囲内に、正殿・脇殿など大形掘立柱建物が検出されている。Ⅲ期政庁の東側では 11・12 世紀代の四面廂建物群や鑪水遺構が確認されており、在国司居屋敷と推定されている。11 世紀末には南東約 400 mへ再び移転し（Ⅳ期政庁）、『高良記』に見える「今ノ符」と想定される政庁は 12 世紀後半ごろまで存続したようである。



第２図　調査地点の位置と周辺地形図（1/5,000）

第３図　遺構配置図（1/100）

Ⅲ．調査の記録

１．調査の目的と経過

調査地は、Ⅲ期政庁の北門から北西へ約 130 mの場所に位置する。また、国府内を東西に横断する推定官道の路線上にあり、推定官道の年代や構造を把握するため調査を行った。

令和２年９月 14 日、表土剥ぎを行い、地表下 50 ～ 60 ㎝で遺構面を確認した。その後、遺構の検出を行い、順次遺構掘削、測量、遺構の写真撮影を実施した。令和２年 10 月３日に全景写真をドローンを用いて撮影した。同月５日に埋め戻しと器材の撤収を行い、現地での作業を終了した。遺構配置図は、トータルステーションを用いて測量し、測量データは「遺構くん cubic」で編集・保存した。ただし、土層図は水糸メッシュ法（1/10）で記録した。

２．検出遺構

今回の調査では、掘立柱建物２棟、溝２条、土坑２基、道路遺構１条、ピット等を検出した。以下、主要な遺構について記述する。

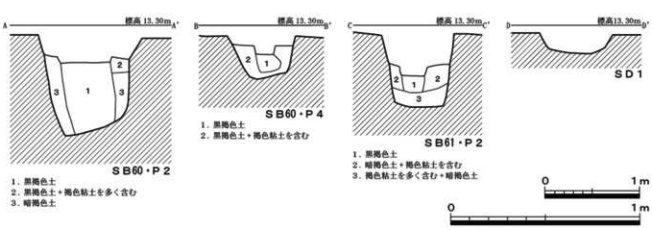
掘立柱建物

ＳＢ 60（第４・９～ 11 図）

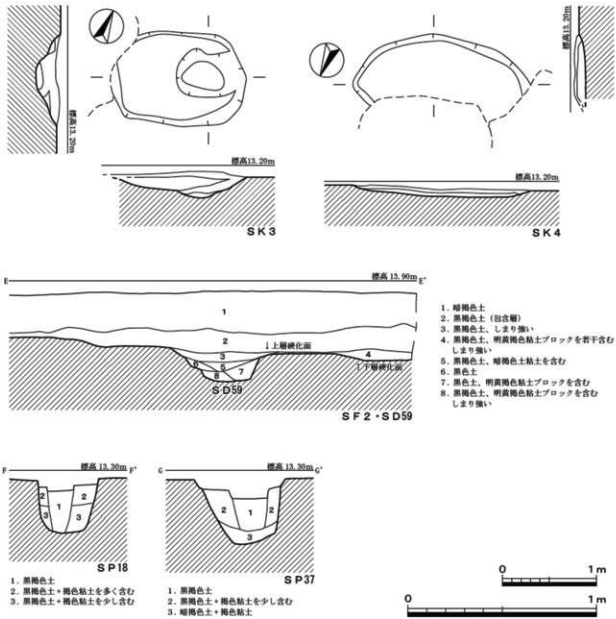
調査区北東部で検出した。一部が調査区外に延びるため、全体の規模は不明である。東西２間(4.6 m、15.3 尺）以上、南北２間（4.4 m、14.6 尺）以上の規模を有する。柱間は東西 2.2 ～ 2.4 m、南北 2.1 ～ 2.2 mと不揃いである。柱掘方は円形・楕円形を成し、径は約 40 ㎝～ 60 ㎝、深さは約 24 ㎝～ 56 ㎝である。建物の計画方位はＮ－６°－Ｅである。出土遺物は、Ｐ５の掘方から黒色土器Ａ類の細片が出土した他は、Ｐ１・２・３から土師器の細片が出土した。

ＳＢ 61（第４・９・12 図）

調査区北東部で検出した。一部が調査区外に延びるため、全体の規模は不明である。東西１間(2.1 m、７尺）以上、南北１間（2.2 m、7.3 尺）以上の規模を有する。柱掘方は円形・楕円形を成し、径は約 30 ㎝～ 40 ㎝、深さは約 37 ㎝～ 47 ㎝である。建物の計画方位はＮ－６°－Ｅである。出土



第４図　ＳＢ 60・Ｐ２・Ｐ４、ＳＢ 61・Ｐ２土層断面図、ＳＤ１断面図（ＳＤ１：1/40、それ以外：1/20）



第５図　ＳＦ２・ＳＤ59、ＳＰ18・37土層断面図、ＳＫ３・４実測図

（ＳＫ３・４、ＳＦ２:1/40、ＳＰ18・37:1/20）

遺物は、Ｐ１・３の掘方から黒色土器Ａ類の細片が出土した他は、Ｐ１・２・３から土師器の細片が出土した。

ＳＤ１（第４・13図）

調査区南部中央付近で検出した。調査区内では、長さ約2.5ｍ分を検出している。南西部は調査区外に延びるが、北東部は途切れる。幅は約0.7ｍ、深さ約20㎝を測る。走行方位はＮ-81°-Ｅである。溝の断面形状は逆台形を呈している。遺物は黒色土器Ａ類や土師器の坏の細片が出土している。

ＳＤ59（第５・18図）

調査区内で、約11ｍ分検出した。幅は約0.6ｍ～1.1ｍで、深さは約0.3ｍを測るが、底面は

東に向かって若干傾斜する。断面形は逆台形を呈するが、西側に行くにつれ北壁が南壁に比べて傾斜が緩くなる。ＳＦ２に伴う側溝と考えられる。土層の堆積状況から、何度か掘り直されていることが推測される。走行方位はＮ-87°-Ｅである。遺物は、土師器の坏や黒色土器Ａ・Ｂ類の細片、縄目文タタキや斜格子文タタキの平瓦などが出土している。

土坑

ＳＫ３（第５・14図）

調査区西部で検出した。西部分を撹乱によって破壊されている。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約1.4ｍ、短軸約1.0ｍ、深さ約28㎝を測る。遺物は、土師器の坏の細片が出土している。

ＳＫ４（第５図）

調査区西部で検出した。西部分を撹乱によって破壊され、北部分はＳＫ３に切られる。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約1.8ｍ、短軸約0.6ｍ、深さ約9㎝を測る。遺物は出土していない。

道路遺構

ＳＦ２（第５・15～18図）

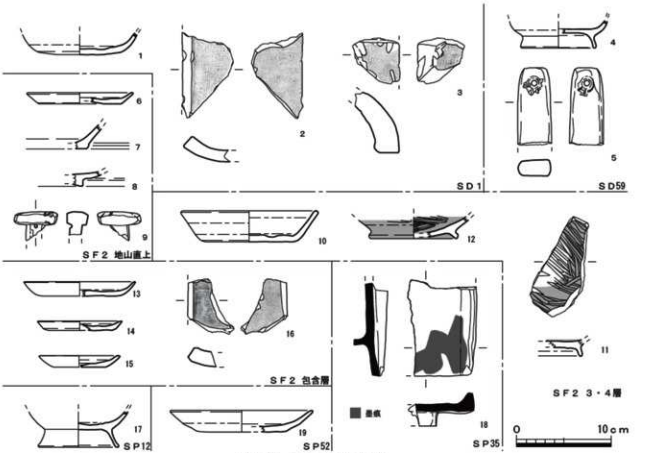
調査区南東部で検出した。硬化面は、第55次調査ＳＦ2709や第169次調査ＳＦ１と同様に上下２面確認できた。下層硬化面は、長さ6.6ｍ以上、幅1.6ｍ以上の規模で、ＳＤ59を側溝として伴うものとみられる。地山を約８㎝～16㎝ほど掘り込み、その上面に硬化面を形成している。礫や土師器、瓦などの細片が硬化面に食い込んだ状態で観察されたことから、礫や土師器、瓦などを散布し、叩いて硬化面を形成したとみられる。下層硬化面には、長軸約20㎝～1.1ｍ以上、短軸約20㎝～50㎝、深さ２㎝～10㎝の楕円形を呈する窪みが約60㎝～70㎝間隔で連続的にみられる。第３図には上端と下端の線で窪みを示しているが、稜がなくなだらかで、全体が硬化している。上層硬化面は、長さ11ｍ以上、幅2.2ｍ以上の規模である。下層硬化面と側溝（ＳＤ59）上に約２㎝～12㎝ほどの厚さで黒褐色土を積み（３・４層）、上面に一部硬化部分が残る。３・４層は全体的に締まりが強く、下層硬化面とＳＤ59を埋め立てる際に何度かに分けて叩き締めたと考えられる。ＳＤ59を側溝とした下層硬化面の使用後に、ＳＤ59と下層硬化面を黒褐色土で埋め立て、幅を拡張した上層硬化面を使用したと推測される。上下２面の硬化面の幅は、ＳＦ２の南部が調査区外へ出ることから不明であるが、両端の側溝を検出している第217次調査では、下層硬化面の幅が6.6ｍ、上層硬化面の幅が11ｍであることが判明している。

出土遺物は、下層硬化面の直上から縄目文タタキの平瓦や越州窯系青磁碗、緑釉陶器、黒色土器Ａ類の細片などがみられた。３・４層中からは黒色土器Ａ・Ｂ類の細片や縄目・斜格子文タタキすり消しの平瓦などが出土した。ＳＦ２を覆う２層（包含層）からは、土師器の小皿、黒色土器Ａ・Ｂ類の細片や縄目文タタキの平瓦、須恵器の坏などが出土している。

ピット

ＳＰ18（第５・19図）

調査区北東部で検出した柱痕を伴うピットである。径は約35㎝で、楕円形を呈する。深さは約



第6図　遺物実測図（1/4）

第1表　出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量(cm) 口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	色調 外面(釉)	内面(胎土)	調整・文様 外面(凸面)	内面(凹面)	胎土 石材、重量	備考	登録番号
1 第6図	SD1	土師器	坏	－	(9.0)	(2.1)	橙	橙	回転ナデ 底部へラ切り	ナデ	精良		202012 000001
2 第6図	SD1	瓦	平瓦	(7.4)	(5.0)	1.2	灰	灰	ナデ消し	布目	1～4mmの砂粒を含む		202012 000028
3 第6図	SD1	瓦	丸瓦	(4.7)	(4.6)	2.2	灰白	灰	ナデ消し	布目	精良		202012 000029
4 第6図	SD59	土師器	埦	－	(7.8)	(2.8)	橙	橙	回転ナデ　ナデ	ナデ	精良		202021 000021
5 第6図	SD59	石製品	硯	(8.1)	3.4	1.6	黄灰				砂岩製 (111.35 g)		202012 000022
6 第6図	SF2 地山直上	土師器	皿	(11.1)	(8.6)	1.2	にぶい黄橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ　ナデ	精良		202012 000003
7 第6図	SF2 地山直上	青磁	碗	－	－	(2.1)	淡緑	灰白	施釉	施釉	精良	越州窯系青磁Ⅰ－1類	202012 000005
8 第6図	SF2 地山直上	緑釉陶器	埦	－	－	(1.2)	浅黄	にぶい黄橙	施釉	施釉	精良		202012 000006
9 第6図	SF2 地山直上	石製品	転用品	4.5	(2.5)	2.1	褐灰				滑石 (31.9g)	石鍋転用品か	202012 000008
10 第6図	SF2 3・4層	土師器	坏	(14.0)	(10.0)	3.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ 底部へラ切り＋板目	回転ナデ　ナデ	精良		202012 000011
11 第6図	SF2 3・4層	黒色土器A類	埦	－	－	(1.3)	橙	黒褐色	回転ナデ　ナデ	ミガキ	精良		202012 000013
12 第6図	SF2 3・4層	黒色土器B類	埦	－	(9.0)	(2.4)	黒褐	黒褐	回転ナデ　ミガキ	ミガキ	精良		202012 000014
13 第6図	SF2 包含層	土師器	皿	(11.2)	(8.0)	1.5	橙	橙	ナデ 底部へラ切り	回転ナデ　ナデ	精良		202012 000017
14 第6図	SF2 包含層	土師器	小皿	(9.0)	(6.6)	1.0	にぶい黄橙	にぶい橙	回転ナデ 底部へラ切り	回転ナデ　ナデ	精良		202012 000019
15 第6図	SF2 包含層	土師器	小皿	(8.6)	(5.6)	1.2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ 底部へラ切り	回転ナデ　ナデ	精良		202012 000020
16 第6図	SF2 包含層	瓦	平瓦	(4.9)	(2.9)	1.5	灰	灰	ナデ消し	布目	1～2mm程度の砂粒を含む		202012 000030
17 第6図	SP12	土師器	埦	－	(8.4)	(3.7)	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ　ナデ	回転ナデ　ナデ	精良		202012 000023
18 第6図	SP35	須恵器	風字硯	－	－	3.5	灰	灰	ナデ　ケズリ	ナデ　ケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む		202012 000025
19 第6図	SP52	土師器	坏	(15.0)	(9.4)	2.3	橙	橙	回転ナデ　ナデ	ナデ	精良		202012 000026

（）は現存値または復元値を示す。

38 ㎝である。柱痕の径は約 14 ㎝である。遺物は土師器の甕の口縁部が出土した。

ＳＰ 37（第５・20 図）

調査区北東部で検出した柱痕を伴うピットである。径は約 49 ㎝で、楕円形を呈する。深さは約 35 ㎝である。柱痕の径は約 20 ㎝である。遺物は、土師器の甕の胴部が出土した。

３．出土遺物（第６・21 図）

今回の調査では、パンコンテナー１箱分の土師器や瓦、風字硯などを確認した。

１～３はＳＤ１から出土した。**１**は土師器の坏で、底部はヘラ切りしている。**２**は平瓦で、凸面はナデ消されているが、凹面に布目が残る。**３**は丸瓦で、凹面は布目が残り、凸面はナデ消されている。**４・５**はＳＤ 59 から出土した。**４**は土師器の埦であり、外面は回転ナデとナデが、内面はナデがみられる。**５**は、長さ 8.1 ㎝、幅 3.4 ㎝、厚さ 1.6 ㎝の石製品であり、下部は欠けている。上部中央に直径６㎜の穴が穿孔されており、両面の表面は円滑である。権と考えられるが、砥石である可能性もある。砂岩製で、重さは 111.35 ｇ。**６～９**はＳＦ２の地山（下層硬化面）直上で検出した。**６**は土師器の皿で、外面は回転ナデ、内面を回転ナデとナデで仕上げる。**７**は越州窯系青磁碗である。内面に目跡があり、外面は全面施釉後に高台の釉を掻き取っている。越州窯系青磁Ｉ－１類。**８**は緑釉陶器の埦で、内外面の一部に淡緑色の釉が若干残っている。**９**はＴ字形を呈する石製品で、滑石製石鍋を転用したものとみられる。Ｔ字の縦部分には径４㎜の円形の窪みが一か所みられる。**10 ～ 12** はＳＦ２の３・４層から出土した。**10** は土師器の坏で、底部にヘラ切りと板目が残る。**11** は黒色土器Ａ類の埦で、内面はミガキがみられるが、黒色化していない円形の部分がある。**12** は黒色土器Ｂ類の埦で、内外面にミガキがみられる。**13 ～ 16** はＳＦ２の２層（包含層）から出土した。**13** は皿で、**14・15** は小皿。**13 ～ 15** はいずれも底部をヘラ切りしている。**16** の平瓦は凸面はナデ消されているが、凹面に布目が残る。**17** はＳＰ 12 から出土した埦である。**18** はＳＰ 35 から出土した風字硯の右下部分である。表面は滑らかであり、墨痕が一部に残る。**19** はＳＰ 52 から出土した土師器の坏である。

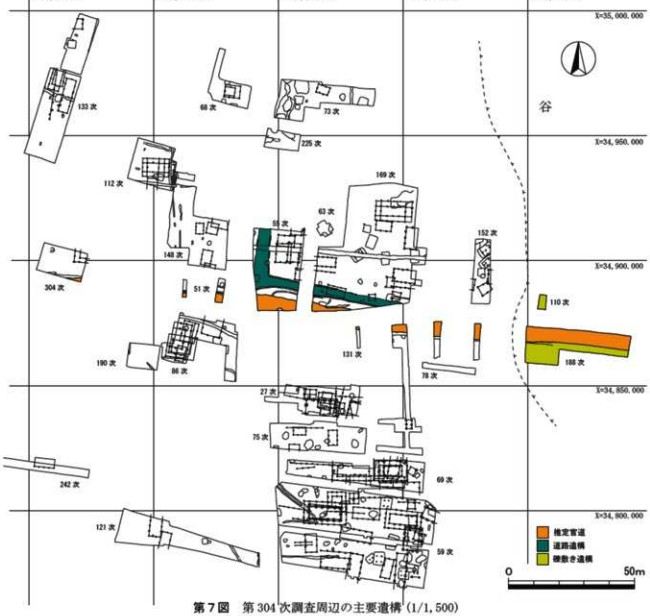
Ⅳ．総　括

今回の調査では、掘立柱建物２棟、溝２条、土坑２基、道路遺構１条、ピット等を検出した。

調査地は、国府域を東西に走る推定官道のルート上にあり、第 169 次調査ＳＦ１や第 55 次調査ＳＦ 2709 の延伸部分にあたるため、ＳＦ２はこの推定官道の一部と考えられる。ＳＦ２は上下２面の硬化面が確認されている。ＳＦ２下層硬化面の築造時期については、下層硬化面の直上から縄目の平瓦や黒色土器Ａ類などが出土しているが、築造か補修のどちらに伴うものなのかが分からず、時期を確認できなかった。下層硬化面の廃絶時期と上層硬化面の築造時期は、下層硬化面を埋め立てた黒褐色土中（３・４層）から黒色土器Ｂ類が出土していることから、10 世紀中頃以降と考えられる。上層硬化面の廃絶時期は、ＳＦ２の２層から底部ヘラ切りの小皿が出土しているため、11 世紀以降とみられる。なお、周辺の調査成果からは、下層硬化面の築造を７世紀末～８世紀初頭、

下層硬化面の廃絶と上層硬化面の築造を10世紀中頃、上層硬化面の廃絶を11世紀末から12世紀初頭の年代が想定されており、今回の調査区での時期とおおむね合致する。

調査区北東部で検出したＳＢ60・61はいずれも計画方位を北から東へ６度傾けている。ＳＢ60・61を構成するピットの掘方の埋土からは黒色土器Ａ類の細片が出土しており、年代の上限は９世紀中頃に求められるが、先後関係は掴めなかった。ＳＢ60・61のピットには重複があり、２～３回の建て替えが想定される。第55・152・169次調査においても計画方位を北から東へ６～７度傾けている掘立柱建物が検出されており、一連の建物群として把握されている。この建物群は８世紀後半代の短期間に営まれており、建て替えが認められない。そのため、第304次調査で検出したＳＢ60・61がこの建物群に含まれているとは考え難く、第304次調査周辺に角度を同じくする別の建物群がある可能性も想定できるだろう。

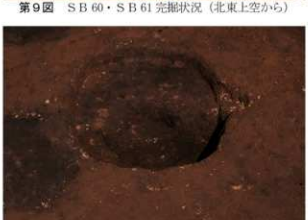


第７図　第304次調査周辺の主要遺構（1/1,500）

第８図　調査区全景（南上空から）

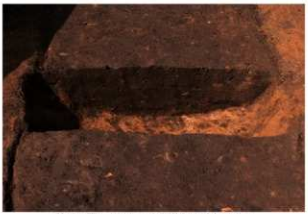
第９図　ＳＢ60・ＳＢ61 完掘状況（北東上空から）

第10図　ＳＢ60・Ｐ２土層断面（西から）



第11図　ＳＢ60・Ｐ４土層断面（南から）

第12図　ＳＢ61・Ｐ２土層断面（南から）



第 13 図　ＳＤ１土層断面（東から）

第 14 図　ＳＫ３土層断面（西から）

第 15 図　ＳＦ２土層断面（西から）

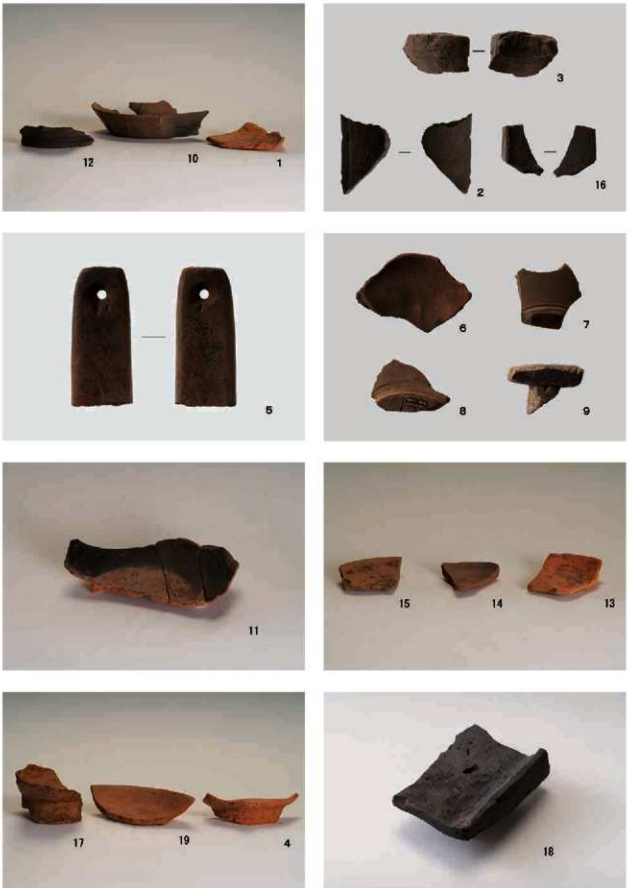
第 16 図　ＳＦ２　３・４層上面（東から）

第 17 図　ＳＦ２硬化面（東から）

第 18 図　ＳＤ 59 土層断面（西から）

第 19 図　ＳＰ 18 土層断面（西から）

第 20 図　ＳＰ 37 土層断面（西から）



第 21 図　出土遺物写真

報告書抄録

ふりがな	ちくごこくふあと －だい 304 じはっくつちょうさほうこく－
書名	筑後国府跡 －第 304 次発掘調査報告－
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 428 集
編著者名	長谷川 桃子
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課
所在地	〒 830-8520 福岡県久留米市城南町 15 番地 3 TEL：0942-30-9225 FAX：0942-30-9714 E-mail：bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	2021（令和 3）年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ちくごこくふあと 筑後国府跡 だい　じ　ちょうさ 第 304 次調査	あさくらけんくるめし 福岡県久留米市 ひがしあやかはまちあもあ　ばん 東合川町字上 138 番 1	40203	030112	33° 18′ 50″	130° 32′ 47″	20200914 ～ 20201005	208 ㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
筑後国府跡 第 304 次調査	官衙	古代	掘立柱建物 溝 土坑 道路遺構 ピット	2 棟 2 条 2 基 1 条 多数	土師器、黒色土器 A・B 類、越州窯系青磁碗、緑釉陶器、風字硯、石製品	推定官道を検出した。

要約

調査地は、国府内を東西に横断する推定官道のルート上にあたる。道路遺構は、調査区南東部で検出し、南部は調査区外に延びる。硬化面は 2 面あり、下層硬化面と側溝を積み土によって埋め立てたのち、上層硬化面を形成したとみられる。時期は、下層硬化面の廃絶と上層硬化面の築造を 10 世紀中頃に、上層硬化面の廃絶を 11 世紀以降に求められ、周辺の調査の成果と合致することが分かった。

土木工事の届出日	令和 2 年 4 月 21 日	遺物の発見通知日	令和 2 年 10 月 7 日 （2 文財第 1349 号）

筑後国府跡
―第 304 次発掘調査報告―
久留米市文化財調査報告書 第 428 集
令和 3 年 3 月 31 日
発行 久留米市教育委員会
編集 久留米市市民文化部文化財保護課
印刷 中村印刷有限会社
久留米市梅満町972